

暗号数字

海野十三

青空文庫

帆村探偵現る

ちかごろ例の青年探偵帆村^{ほむらそうろく}荘六の活躍をあまり耳にしないので、先生一体どうしたのかと不審に思っていたところ、某方面からの依頼で、面倒な事件に忙しい身の上だったと知れた。最近にいたって、彼はずっと自分の事務所にいるようである。某方面の仕事も一段落ついたので、それで休養かたがた当分某方面の仕事を休ませてもらうことに話がついたといっていた。

僕は、実はきのう、久しぶりで或るところで帆村荘六に会った。

彼は例の長身を地味な背広に包んで、なんだか急に年齢^{とし}がふけたように見えた。顔色もたいへん黒く焦げて、例の胃弱らしい青さがどこかへ行ってしまった。色眼鏡を捨てて縁の太い眼鏡にかえ、どこから見てもじじむさくなくなった。そのことを僕が^{からか}揶揄うと、彼は例の大きな口をぎゅつと曲げてにやりと笑い、

「ふふふふ、ちかごろはこれでなくちやいけないんだ。街へ出ても田舎へ行っても、どこ

にでも行きあうようなオツサンに見えなくちや、御用がつとまらないんだよ。そういう連中の中に交つて、こつちの身分をさとられずに眼を光らせていなくちやならないんだからね。昔のように自分の趣味から割りだしたおしやれの服装をしていたんじや、魚がみな逃げてしまう」

と、俗っぽい服装の弁をいくさりやった。

そこで僕は、彼がちかごろ取扱つた探偵事件のなかで、特に面白いやつを話して聞かせろとねだつたのであるが、帆村はあつさり僕の要求を「いっしゅう蹴した」。

「諜報事件に面白いのがあるがね、しかし僕がどんな風にしてそれを曝あばいたかなんてことを公表しようものなら、これから捕えようとしている大切な魚がみな逃げてしまうよ」

と、彼は同じことをくりかえし云つた。

そのような事件におどる魚は、そんなにはしつこいものであるのか。そういう問にたいして帆村莊六は、

「そういう事件に登場する相手は非常に智的な人物ばかりなんだ。だから若もしちよつとこつちが油断をしていれば、たちまち逆に利用されてしまう。全く油断も隙もならないとはこのことだ。そして相手はみんな生命がけなんだから、あぶないつたらないよ。しかも相

手の人数は多いし、組織はすばらしくりっぱで、あらゆる力を持っている。そういう相手に対し、われわれ少人数でぶつかって行くんだから、本当に骨が折れる」

「なんかその辺で、差さしつか支えない話でも出てきそうなものじゃないか」

と僕がすかさず水を向けると、彼は新しいたばこ葎たばこに火をつけながら、

「うん、一つだけ話をきかせようかな。これは八、九年前に僕自身が自演した失敗談だ。

例の手剛ていごい相手どもが如何に物を考えてやっているかという一つの材料になると思うよ。

しかも僕としては、いまだかつて、これほど頭をひねった事件はなかったのだ。脳細胞がばらばらに分解しやしないかと思つたほど、いやもう頭をつかつた。——しかも後でふりかえつてみると、実に腹が立つて腹が立つてたまらないくらい、僕ひとりこまで独楽こまのようにくるくる廻つていたという莫迦ぼか莫迦ぼかしい精力浪費事件なのさ」

帆村はそういつて、心外でたまらぬという風に大きな脣くちびるをぐつと曲げた。

ぜひ聞かせてもらいたいというと、彼は、

「うん、話をするが、この事件は結局いくら莫迦莫迦しくつたつて、さつきもいうとおり僕が取扱った事件の中で一番骨身をけずつて苦しんだ事件なんだから、そこに深甚なる同情を持つて君もゆつくり考えながら終りまで黙つて聞いてくれなくちゃ困るよ」

と、いつになく彼は僕に聞き手としての熱意を強いたのであった。

もちろん僕は大いに謹聴すると誓ったが、これから思うと、その事件において帆村は、よほど、にがにがしい苦杯を嘗めたものらしい。

以下、帆村の物語となる。

秘密の人

恐らく、あの頃から後の数年が、一番多種多様の諜報機関が、国内で活動した時期だと思ふ。国際関係のものは勿論のこと、営利専門のものもあるし、情報通信のもの、経済関係のものなどと、ずいぶんいろいろの諜ちようじゃ者が活躍をしていた。時には同士どうしうち討もあつて面白いこともあつた。

およそ相手方の諜者にやらせてならぬことは、こっちの秘密を知られることと、これを相手方の本部へ通達されることの二つである。なかでも後者に属する通信であるが、これ

に対しては、水も洩らさぬ警戒をしなければならなかった。

あらゆる秘密通信機関を探しだして、これを諜報者の手から取上げること、しょうび 焦眉の急を要することだった。幸いわが国の通信事業は官庁の独占または監督下にあつたため、比較的取締に都合がよかつたし、また秘密通信機がコツコツとモールス符号を送りだしてもすぐそれを探しあてるほどの監督技術をもつていたから、これも都合がよかつた。その当時、そういう秘密通信機関で摘発され、或いは発見されたものの数はすこぶる多い。

帆村莊六が事務所に備えつけていた最新式の短波通信機も当局の臨検にあり、もちろんのこと押収の議題にのぼつたけれど、当時彼は既にもう某方面の仕事を命ぜられていたので、その方に必要な道具であるとして幸いにも押収を免れた。そのとき帆村は、この短波通信機が此処ここへ来てそれほど貴重なものとなつたとは認識していなかつたけれど、後から聞いた話によると、民間機でその当時押収を喰わなかつたものとしては、帆村機の外に殆んどなかつたとのことである。当時帆村はそういう事態を、それほどまで深刻に認識していなかつたのだ。もちろん誰かからそういう説明を聞けばよく分つて警戒もしたであろうが、事実説明はなかつたとのことである。

さて或る日、帆村の事務所へ電話がかかつてきた。おおつじ 大辻という助手が出て、相手の名

前を訊ねたところ、貴方は帆村氏かという。大辻助手が、私は主人の帆村ではないと応え
ると、相手は帆村氏を電話口へ出してくれと行って、なかなか身柄を明かさなない。そこで
大辻はその由を帆村に伝えたが、まあこんな風な電話のかかって来方は事件依頼主が身柄
を秘したいときによくやる手で、それほど大したことではなかった。

入れかわって帆村が電話口に出てみると、相手はまた入念に帆村であることを確かめた
上で、

「——実は、こつちは内務省なんですが、秘密に貴下の御力を借りたいのです」
と、始めて身柄を明かした。

そういう官庁とは、はじめての交渉であつたけれど、官庁のことゆえ、帆村は助力をし
てもいいが、と一応承諾の用意があることを明らかにし、その依頼事件の内容について訊
ねた。

すると相手は、

「いや、もちろん電話ではお話できませんから、お会いしたい」
という。

「ではいつそちらへ伺いましょうか」

と帆村が訊ねると、

「なるべく早いことを希望します。しかしこつちへお出でになると、いろいろな人物も出入していることだしするから、目に立っていきません。だから外でお目に懸りましょう。それには、こうしてください」

といつて、木村氏と名乗るその役人は、帆村に対し、今から三十分後、日比谷公園内のどこそこに立っていてくれ、すると自分はこれこれの番号のついた自動車に乗ってそこを通るから、そこで車と一緒にのつてくれるように、あとはこつちは委せてくれということだった。帆村は承知の旨を応えて、電話を切った。

大辻助手には、すぐに出懸けるからと前提して、電話の内容を手短かに話をし、帆村がどこに連れてゆかれるかを確かめるため、適当に車をもって公園の中に隠れており、うまく尾行をするように、そして送りこまれたところが分れば、すぐに事務所に戻っているように、またそれから一時間経つて、帆村からなんの電話も懸つてこないときは、すぐさま飛びこんでくるように申し渡して、事務所を出たのであった。というのも、官庁は別に怪しくなくても、いつ悪者どもが官庁の御用らしく見せかけて、こつちに油断をさせないでもないからのことだった。

帆村は十分の仕度をして、木村氏にいわれたとおり、三十分のちには日比谷公園の所定の場所に立っていた。

それから五分おくれて、形は大きいセダンではあるが、型は至極古めかしい自動車がとおりかかった。なるほど一目でそれと知れる官庁自動車だった。ラジエーターの上には官庁のマークの入った小旗がたてられていた。

「ああこれだな」

と思つた折しも、車が帆村の前にぴたりと停り、中にいた四十がらみの鼻下に髭のある紳士が帆村の方へ顔をちかづけて、

「木村です。さあどうぞ」

と、柔味のある声音で呼びかけた。

帆村はそのまま車内の人となった。

そして彼は、木村氏の案内によつて築地つぎじの某料亭の門をくぐつたのであった。時刻は丁度午後三時十七分であつた。

暗号の鍵

「やあ、どうもたいへん失礼なところへ御案内いたしました——。でもこうでもしないと、私どもの官庁の重大事件を貴下^{あなた}にお願いしたことがどこへもすぐ知れ互ってしまっていますで」

と、情報部事務官木村清次郎氏は、初対面の挨拶のあとで、すぐと用談にとりかかった。「——これは、政府の一大事に関する緊急な調査事件なのですが、もちろん絶対秘密を守っていただかねばなりません。御存知かもしれませんが、実は今有力なる反政府団体があつて、大活躍を始めています。この秘密団体の本部は上^{シヤンハイ}海あたりにあると見え、その本部から毎日のごとく情報や指令が来ますが、その通信は秘密方式の無線電信であつて、もちろん暗号を使っています。ですから普通の、受信機で受けようとしても、秘密方式だから、普通の受信機では入らない。その上、符号は暗号だから、たとえコピーが見つかったとしてもその内容が解けない。こういう風に二重の秘密防禦^{ぼうぎよ}を試みています。お解りですか」

帆村は黙つて肯いた。^{うなず}そんなことは先刻承知している。

木村事務官は語をついで、

「これは秘密ですから、どうかお間違いのないように。ところで問題は、その暗号解読の鍵なんです。それがどうも分らない」首をひねり、「送ってくる暗号文は六桁^{けた}の数字式です。つまり、123456といったような六桁の数字が、AとかBとかいう文字を示しているのです。ところがその六桁の数字は、そのままではいくら解いてみても分らない。つまりその暗号法では鍵^{キー}となる別の六桁の数字があつて、それを加えあわせてある。たとえばその鍵の数字が330022だったとすると、暗号文のどの数字にもこれが加えてある。だからAが123456であらわされるにしても、123456として送つては来ないで、鍵の数字330022を加えた結果、すなわち453478として送ってくる。だからこの453478のままでは、途中で誰かが読んでもまるで本当の暗号123456を想起することができない。このように暗号には、鍵の数字というやつが大切なのですが——いや、お釈迦^{しやか}さまに説法のように恐縮ですが——これがまた厄介なことに、一ヶ月ごとにひよいひよいと変る。今月330022だったとすると、来月の一日からは787878という風にならりと変つてしまう。こうなると解読係はまったく泣かされてしまいます」

とって木村氏は、茶をのんだ。

料亭の人は二人の前に茶菓をおいたまま行ってしまった。こっちで呼ぶまで決して来ない、いいつけであった。

「解読係も腕達者を揃えてありますが、六桁の暗号数字から、鍵の数字を見つけるのになかなか骨が折れます。苦心の末やつと見つけたと思うと、もう月末になっていて、すぐ次の月が来る。そうなると、また新しい鍵の数字が入ってくるから、さあ一日以後は、向うの暗号が全く解けない。改めて鍵の数字の勉強をやりなおすというわけです。私としても、解読係員の苦労は常に心臓の上の重荷です」

と、木村事務官は深い溜息をついた。

帆村は、ただ黙々として肯く。木村氏の暗号に対する話の内容は、彼の持っている知識と完全に一致していたのである。

「そこで問題の鍵の数字ですが、もし月が変わる前に、うまく発見ができるものなら、われわれにとつてこれくらい有難いことはないわけです」

「なるほど」

「ねえ、そうでしょう。この暗号の鍵数字は、いつどんな風にして送ってくるのであろう

かということにつきまして、もう長い間調べていましたが、極く最近になって、それがや
つと分りかけたのです」

「ほほう、それは愉快ですね」

と帆村もようやく膝をのりだした。

「全く涙の滾こぼれるほど嬉しいことです。私たちは、その暗号の鍵キイが、やはり無電にのつて
くるのかと思つたのですが、そうではない。秘密結社の本部では飽くまでも用意周到を極
めています」

「ははあ」

「鍵の数字は、どうしてこつちの支社へ知らせてくるんだと思われませんか」

「さあ——」

「実をいうと私たちに、まだよく分つていない」

「それではどうも——」

「いや、しかし貴重な手懸りだけはやつと掴んだのです。見て下さい。これです」

そういつて木村氏が帆村の眼の前に持ち出したのは、黒い折おり鞆かばんであった。

折鞆のなかから現われたのは、一体なんであつたらうか。それは四六倍判ぐらいの板で

あつて、その上に大きな金色のペン先がとりつけてある。察するところペン先の広告看板なのであつた。英国の或る有名なペン先製造会社の名が入っていた。そしてこの看板をぶら下げられるように、金具がうってあつた。

「これは面白いものですね。しかしどうしてこれが暗号の鍵の数字に關係あるのか分りませんが」

と、帆村は首をふつた。

「それは今説明します。立派な説明がつくのです。これをごらん下さい」

といつて、木村氏は鞆の中から懐中電灯のような細長いものを出して、ペン先の看板の裏へかざした。

「さあ、いま私がこの紫外線灯のスイッチを押して、この裏板へ紫外線をあててみます。すると一見この何にも書いてないような板の上に実に興味あるものが現われますから」

木村氏が手にしていた細長い懐中電灯様のものは、紫外線灯だったのだ。帆村が感心しているとき、スイッチが入ったものと見えて、裏板がぱつと青く光った。見れば、それは文字の形になっているではないか——。

①X=□□□□□□□□=74□×6.~

②ハ東京市銀座四丁目帝都百貨店洋酒部ノ「スコッチ・ウイスキー」ノ広告裏面。
赤キ上衣ヲ着タル人物ノ鼻ノ頭に星印アリ”
と、^{おどろ}愕くべきことが書いてあつた。

車馬賃一万円也

帆村莊六は、木村事務官と別れて、いよいよ活動に入った。

ペン先の看板の裏に書かれた×∥□□□□□□□□□□□□□□□□こそ、探す暗号の鍵の数字であつた。しかしいかなる数字であるか、はつきり記さず「□□×？」と妙な書き方をして逃げてある。そしてこれを①として、あとは②を探せというような書きっぷりであつた。実に不思議なペン先の看板だ。

どうして木村事務官がこれを手に入れたかについて帆村は質問の矢を放つたが、事務官はその説明を拒絶した。そしてこんなことを云つた。

「それを説明すると、私どもの役所が使っている重要な情報網の秘密を洩らすことになり
ますから勘弁してください。しかしこれは十分 信憑しんぴようすべきものであることを断言しま
す。この□□□□□□は、来月の暗号の鍵数字であること疑いなのですが、肝腎の数字
が入っていません。これは次の②という場所、つまり銀座の帝都百貨店洋酒部にあるスコ
ッチ・ウイスキーの広告をさがして、その裏を見て考えるよりほかないのですが、この仕
事を貴下にお願ひしたいのです。私どもがやつてもやれなういかもしれませんが、たび
たび申すとおりに、それではすぐ彼等の方に分つてしまいます。そこは貴下を煩わづらわした方
が、巧みにカムフラージュにもなるし、またお手際も私どもより遙かに美事みごとであろうと思
うのです。どうか一つそのような事情をば御考慮の上、直ちに活動をはじめていただきた
い。しかも絶対秘密です。それからもう一つ、お気の毒ですが、今日は二十六日で、あと
五日で来月となります。ですからこの調査は、即時とりかかっていたきたい。そしてあ
らゆる手段を使つて、一時間でも早く完了していただきたい。遅れてしまうと、政府にと
つてたいへんな損害ですから——それから云うまでもありませんが、十分身边を警戒して
下さい」

そういつて木村事務官は、車馬賃として金一万円也の紙幣束を帆村に手渡したのであつ

た。必要あらば、金はいくらでも出すからいつてくれ、秘密連絡所として市内某所を記した名刺を手渡した。そこは普通の民家を装つてあるが、長距離電話もあれば、電信略号もあり、振替番号まで詳細に記載してあつた。

帆村莊六は、この木村事務官との会見によつて、珍らしいほどの大昂奮だいこうふんを覚えた。なかなか手剛い相手である。こつちへ送られて来た来月の暗号の鍵を、いかなる危険をおかしてもこの五日のうちに探しあてるのだ。非常にむずかしい仕事であることはよく分つている。従来の暗号でこのような数学みたいなものを出したものがあるのを聞いたことがない。骨が折れることは目に見えている。

「よし。どんなことをしても、この六桁の暗号の鍵を解かずには置くものか」

帆村は料亭を出ると、すぐさま公衆電話函に駆けこんで、大辻助手を電話口に呼びだした。こういう重大事項になると、大辻にも云い明かしかねたが、程よく大意を伝え、ここ五日ほど不在にする事務所の留守を、かねて云いつけて置いたとおりによくやるよう頼んだ。

「先生、僕を連れていつて下さらないので心配です。しかしお伴がかなわないということでは仕方がありませんが、どうかくれぐれも身边を御用心なすつて下さい」

と、大辻助手はしきりに帆村の身の上を案じていた。

それからいよいよ帆村の活動が始まったのである。全くの一本立だった。自分の頭脳と腕力とが、只一つの資本だった。

$$\textcircled{1} X = \square\square\square\square\square\square\square\square = 74\square X \text{?}$$

さあこれをどう解いてゆくか、この奇妙な暗号の謎を。

とにかく次に目指すは②だ。銀座の帝都百貨店の洋酒部とある。

かれはすぐその足で、地下一階にある洋酒部の売場に近づいた。

ぶらりぶらりと客を装いながら洋酒売場を物色するうちに、彼は遂に、問題のスコッチ

・ウイスキーの絵看板を洋酒の壇びんの並ぶ棚に見つけた。なるほど赤い上衣をつけた西暦一

千七百年時代の英人が描いてあった。近づいてみると、鼻の頭に、例の特別記号の一つ星が書きこんであった。

「なにか御用でございますか」

と、生意気そうな店員が、帆村の方に言葉をかけた。こんなところにお前のような貧乏人の用はないぞといわんばかりの態度であった。

「ああその何だ。コクテールの材料をあつめたいのだ。あそこの棚をのぞいてみたいから、

ちよつと梯子はしごを貸してくれたまえ」

帆村は梯子をもつてこさせると、つかつかとその上にあがっていった。そして高価な洋酒の壘を、あれやこれやと矢鱈やたらに選りえつづけるのだった。

店員の態度が、可笑おかしいほどがらりと変った。そこにはない洋酒をいうと、倉庫にあるから只今持つてまいりますと、奥の方へすつとんでいった。それが帆村の覬ねらいどころで、彼は梯子にのぼったまま、身体の蔭になつてゐる側のスコッチ・ウイスキーの絵広告をそつと外し、その裏面に木村事務官から渡された紫外線灯をさしつけた。

「呀あつ、なるほど！」

帆村はかねて期したるところとはいへ、果然発展してゆく秘密数字の謎が秘密ポイントで書かれてあるのを発見して、愕おどろきをかくし切れなかつた。そこに書いてある文字は上のようなものであつた。

② 「第一図」

7 4 □ □) □ □ □ □ □ □ □ □

□ □ □ □ 2

③ ハ東京新宿追分「ハマダ」撞球場内ノ世界撞球選手「ジヨナソン氏」ノポスターノ裏カフス釦ニ星印アリ

未完成の割り算

円タクの中で、帆村はノートの中をしきりと覗きながら、頭をひねるのであった。

帝都百貨店で拾い集めた②の記載によれば、問題の六桁数字は、果然不思議な割り算の形をとっている。その謎の数字を74□で割って、その商として始めの一桁に8をたさせ、

これを74□に掛けて□□□2なる数字を得ているのである。

「これは実に愕くべき暗号の隠し方である」

と帆村は感嘆久しゅうしている。

一ヶ所では分らず、第二、第三と場所を追ってゆかなければ、暗号数字は解けないようになっていいるのだ。しかも求める数字は、被除数の形となっていて、智恵のない人間には到底そのまま分りそうもないことになっている。これではいちいち□の中に隠されている数字を導きださねば求める謎の数字は結局出てこない仕掛けになっている。

「これは六ヶ敷いことになった」

と思ったが、早く考え出さなければ間にあわない。ピンチは迫っているのだ。

「よおし、考えるだけは考えておこう」

帆村は、うつしとつてきたノートを熱心に見つめた。しばらく見ているうちに、彼は一つのヒントをつかんだ。

「なるほど、やつぱり考えてみるものだなあ。すこしずつ解けるじゃないか」
かれはどういう風に考えたか。

74□に8をかけて、その答が□□□2となるのである。こういう風に8をかけて一の位

に2が出てくる場合は、そう沢山あるわけではない。——彼はノートへ、上のような符号をつけた。

〔第二図〕

②

8 ↑ ハ

7 4 A) B C D E F G

→ → H I J 2

イロ

→

ニ

A B Cなどの英字は、まだいくつとも分っていない数字である。イロハなどは、もう7とか4とか確定している数字である。

だからいまはAの問題なのである。さていろいろやってみると、Aは二つの答をとるこ

とが分った。すなわち $A=4$ と $A=9$ の二つの場合である。

$A=4$ なら、 744×8 となって、答は5952となる。また $A=9$ なら 749×8 となって答えは5992となる。どっちも一の位は2である。これが第一の発見である。

それに元気づいて、なおも考えをつづけてみると、果然不可解の数字のうち二つまでが確定することが分ったので、帆村は躍りだしたいほどの悦びを感じた。

それはいずれの桁形ますがたの中の数字であろうか。

結論を先にいうと、 $H=5$ 、 $I=9$ と決定するのである。なぜならば右にのべた $A=4$ の場合は5952であり、 $A=9$ の場合は5992であり、この二つを比べてみると、千の位と百の位はどっちも同じ59である。だから当然 $H=5$ 、 $I=9$ でなければならぬ。

「なるほど、これは面白い答だ」

と、帆村は口のうちに叫んだとき、彼ののった円タクは、新宿追分おひわけの舗道に向ってスピードをゆるめ、運転手はバック・ミラーの中からふりかえって、

「旦那、この辺でいいですか」

とたずねた。

帆村は大切なノートをポケットに収しまって、舗道の上に降りたつた。

さあこれからハマダ撞球場へ乗りこむことになったのだ。うまく例のポスターを探しあてられるかどうか。行手は晴か曇か、それとも暴風雨か。あらし

まだ夕刻のこととて、ハマダ撞球場は学生やサラリーマンで七台ある球台が、どれも一杯だった。帆村はやむなくゲーム取が持ってきたお茶をすすりながら、台のあくのを待つよりほかなかった——という気持で、これ幸いと、場内のあちこちにぶら下っているポスターを眺めまわした。

「無い！　いくら見ても無い。変だ」

帆村はがっかりした。あつてもよいはずのジョナソン氏のポスターが見えないのである。それがないようでは、折角の探偵事件がここで挫折する。それは全く困る。彼は腕ぐみをして次なる智慧をひねくった。

しばらくすると、彼の口辺に急に微笑が現われた。彼は立ちあがってタオル蒸しと同居しているような恰好のマダムのところへ歩いていった。

「ねえ、マダム。ジョナソンのポスターが来ているだろう。あれを出しなよ。壁にかけとくと立派だぜ」

「ジョナソンのポスターって、あああれだわ、まだ丸めたまま置きっ放しになっていたわ。

これなんでしょう」

と、マダムは戸棚からぐるぐる捲きにしたポスターを取りだした。解いてみると、果してジヨナソンと署名が印刷してある。帆村の第六感はうまく的中した。

帆村は、そのポスターを壁に貼ると、ゲーム取に向つて、なかなかあきそうもないから下へ行つて紅茶をのんでくるからといひ置いて外へ出た。

外へ出るなり、彼は円タクを呼びとめて、車中の人となつた。

「旦那、どこへまいります」

「うん、東京駅だ。時間がないから、急いでくれ」

ロンドン塔

帆村は、二等客車のなかに揺られながら東海道線を下りつつあつた。

辛うじて彼は、午後六時きつかり東京駅発車の岡山行の列車にとびのることが出来た。

④ハ沼津市駅前、菊屋食堂ノ「ロンドン」塔ノ写真ヲ焼付ケテアル鏡ノ裏面。塔ノ上ヨリ三ツ目ノ窓ニ星印アリ

これは例の新宿追分ハマダ撞球場にしまつてあつた世界的撞球選手ジヨナソンのポスターの裏に紫外線灯をさしつけて素早く読みとつた文字の写しであつた。これによると、割り算が三段となつて、一段殖えた。

帆村は躍起^{やっき}となつて、この月足らずの割り算に注意を向けた。第三段目に□9□□といふ四位の数字が殖えたが、これによつて、謎の枠^{わく}の中の数字をまた新しく類推できるにちがいないと思つた。

彼はノートを書きなおした。

〔第四図〕

③

8 ↑ ハ

7 4 A) B C D E F G

→ → H I J 2 ↑ 二
イロ

K 9 L M

ホ →

これについてまず分るのはDはJよりも小さいということだ。なぜなら、前にわかったようにJは5か9かであるがその下のホに9という数字が出ているから、ここへ9が出るためには、どうしても上のDの方が下のJより小さくなくては、そういうことにならぬ。

するとDは、一桁上のCから1を下げてもらってJを引くことになる。

すると今度はCが零であり得ないことになる。もしCが零なら、Dへ1を送って9が残るが、その下のIは9であるから、6-6=0となつてKが零にならねばならぬ。しかるにKは零ではないから枠が書いてある。Cは零であり得ないことがこれで分る。

そうなるとB=9と確定する。なぜならば、Bの下のHは5で、更にその下には数字がない。而も^{しか}Cは零でなく、たとえ9であつてもDへ1を取られて8を残すから、Iすなわ

ち9が引けるためにはBは6の外に取るべき数字がないのである。

またもうすこし深くDを研究すると、除数が「 2^4 」のときには $D=4$ 、また「 4^9 」のときには $D=8$ となる。

もつともEが2より小さい1か零であるともう一つ上の数字になるが、それはまず少い場合といわなければならない――。

そのほかのことは、まだどうにもはつきりさせようがなかった。帆村はノートを閉じて、車窓の向うにぐんぐん流れゆく田園風景に目をやった。畑はどこも青々としていて、平和そのもののように見えるのを感じしているうちに睡くなって寝込んでしまった。

どの位睡ったかしらぬ。列車ががたと揺れたので眼を覚ました。ちようど今列車は電灯があかあかとした駅の構内にスピードをゆるめて入っていった。駅名を見ると、沼津だ。正に午後八時五十五分のことであった。

彼は列車を捨てて駅の外に出た。

腹はおそろしく空^すいていた。考えがあつて、車内で喰^{ひか}べることを控^{ひか}えていたのだ。考えとは外でもない。宝探^たみたいな例の暗号手引によって、駅前の菊屋食堂に入って調べなければならぬとすると、ここは我慢して空きつ腹にして置く方が便利であったのだ。

菊屋食堂は、大きな看板が出ているので、すぐそれと分った。

「姉さん。すっかり腹を減らしてしまったよ。いそいで食事をこしらえてくれないか。ええと、献立はエビのフライに、お刺身さしみに、卵焼きに、お椀にライスカレーに、それから……」

ウエイトレスがくすくすと笑いだした。あんまり多量の注文だからであつた。

帆村はそれをきつかけに、ウエイトレスと心やすくなつてしまった。

「なんだなんだ、これは綺麗な橋がついているじゃないか」

と、帆村は壁のところにかよつた。

「ロンドン塔の写真よ。昔その中で、たくさんの人が殺されたんですつて。その中には王子様も交つていたのよ」

「へえ、君は物しりだね、そんな恐ろしいところとは見えないほど綺麗なだ。なるほど」

そのとき内から声があつて、ウエイトレスを呼んだ。どうやら料理が上つたようである。

——帆村は苦もなく、ロンドン塔を裏へひっくりかえして、鏡の裏面に紫外線ペイントで書いてある秘密文字を拾うことができた。

それをノートへうつしとつたときに、ウエイトレスが湯気ゆげのたつ卵焼きを盆はこにのせて搬

んできた。帆村はなにくわぬ顔をして、卓^{テーブル}子のところへ戻ってきた。

次から次へと搬ばれてくる大味な料理をどんどん片づけながら、帆村は壁に貼ってある時間表へしきりに目をやっていった。

「十時二十五分、神戸行急行というのに乗るよりほか仕方がない」

彼は次の旅を考えていたのだ。目的地は大阪であった。段々と西へ流れて東京から遠くなってゆくことが、なんとなく不安であった。彼はそれが常住の土地を離れた者の望郷病だと解し、自分の心の弱さを軽蔑した。

食事がすんで時計を見ると、列車にのるまでまだ小一時間もたつぷり余裕があったので、彼は窓ぎわに涼^{りよう}をとるような恰^{かつこう}好をしながら、その実、例の鏡の裏から読みとった新しい暗号の発展を脳裡^{のうり}に描いていた。

彼のノートには、第五図のように書いてあった。

〔第五図〕

④

7 4 □ ()
 □ □ □ □ □ □ □ □

□ □ □ □ 2

□ □ 9 □ □ □

□ □ 7 4 □ □

⑤ 八 大阪市新世界「アシベ」劇場内ニ掲出ノ「ロビンフッド」ノポスターノ右下隅。星印アリ

これで見ると答の二桁目が出ているが、枠で囲ってあるから、何の数字やらわからない。四段目の四数字のうち□ $\overline{7}$ □□と二字だけ分つたのは、有力なる手懸りだ。

帆村はこれを整頓して、いままで分つた数字を入れたり、新しい枠のなかに記号をいれたりした。それは別掲のとおりだった。(第六図)

〔第六図〕

④

→ N
 → 7 ホ →
 9
 L
 M

イ → 7
 口 → 4
 A
 H → 5 6
 I → 9 C
 J D
 2 E
 ↑ F
 二 G

8
 X ← ハ

帆村は、しきりと名答を考えつづけた。

へトが74と出ているから、ここに^{ねら}へ覗いをつけなければならぬ。答の二桁目はXであるが、除数の74AにXを掛けたものが、N74Pとなるのである。

ところでへすなわち7がここに出るためには、除数すなわち74Aの74に対してXが決まってくるであろうと思われる。

そこでXを零から9までにとつて調べてみると、Xの値は次の二つのうちどつちかである。 $X=5$ ・9だ。もつと説明すれば、Xが5なら、除数のはじめの二桁74との積は370となり、へに7が出る。またXが9なら、積は666となって6が出るが、これは $A \times X$ の項を加えると、当然666が67?という風に7となる筈である。

とにかくこうして、Xは5か9かのどつちかという見当になった。

そこで更にすすんで、除数74AのAが4の場合と9の場合とについて検討してみるのに、次のようになる。

744で $X=5$ のときは、答は3720となる。これは□74□に合わないから、仮定が合わ

ない。

次に同じく744で $X=9$ として答を求めてみると6696となり、これも□74□の形に合わないから駄目。

こんどはAを9として、749に $X=5$ を仮定してかけてみると、答は3745であるから、これは□74□と一致する。

もう一つ、同じく749に $X=9$ を仮定してかけてみると、これも6741となって一致するのである。

すると744は落第で、749が合うことになる。

されば $A=9$ と決定を見た。

Xの方は5か9か、まだどつちとも分らない。

Aが9ときまれば、H112は綺麗に計算ができて、5992となる。HとIとは前から分っていたが、これをもってJ=9と定まる。

あとはNが3か6か、またPが5か1かということになるが、それだけのことだ。

ここまで考えて、帆村はやつと重い荷を一つ下ろしたような気がした。早く大阪へついでこの鍵キを解いてしまいたくて、たまらない。

救難信号

帆村は列車のうちに一夜を明かした。その翌朝の六時三十八分というのに、列車は大阪駅に入った。

すこし神経がつかれたのか、頭が痛い。それを我慢して、大阪の街に一步を印しるした。

天王寺に近い新世界は、大阪市きつての娯楽地帯であった。そこにはパリのエッフェル塔を形どった通天閣があり、その下には映画館、飲食店、旅館、ラジウム温泉などがぎっしり混んでいた。

帆村はもう一所懸命であったから、顔も洗わず、飯も喰べないでこの新世界へ車をとばしたのであった。

アシベ劇場は、通天閣のすぐ脇にあった。しかしあまり早朝なので、表戸はしまっていて内部を覗うかがうよしもない。通りかかった女性に聞くと、まだ三時間ほど待っていないければ

⑥富山市公会堂事務所二置カレタル「オルゴール」時計ノ文字盤。商標ノトコロニ星印アリ

□□4□と、第五段めの四桁数字が出てきた。これをQR4Sと記号をふった。

この辺で大概決ってしまうであろうと思つて調べてみた帆村は、大きい失望を経験しなければならなかつた。なんの新しい決定もないのであつた。F||Mであつたように、G||Sであるが、さてそれが如何なる数字であるか分らぬ限り、なんにもならない。

「早く富山に行つてみなければ駄目だ」

と帆村はアシベ劇場の休憩室で、大きな欠伸あくびを一つした。

とうやら次の富山がゴールのようである。なにごとともそこで決りがつくのだ。

帆村はふらふらする身体を立てなおしながら、日本空輸へ電話をかけた。

「もし、富山行きの旅客機に席が一つ明あいていませんか。もちろん今日のことです」とすると返事があつて、明いているという。そこで切符を頼んで、名前を登録した。出発時間とは聞けば、午前十一時十分だという。あと一時間半ばかりあつた。

帆村は公衆電話函を出ると、急に酒がのみたくなつた。

あまり時間はないが、こうふらふらでは仕方がない。ことにこれから空の旅路である。ぜひ一杯ひっかけてゆきたい。そう思った彼は、新世界をぐるぐるまわりながら、酒ののめるところを物色した。

あとで聞くと、それは軍艦横丁という路次だったそうであるが、そこに東京には珍らしい陽気なおでん屋が軒をならべていた。若い女が五、六人、真赤な着物を着て、おでんの入った鍋の向うに坐り、じゃんじやかじゃんじやかと三味線をひっぱたくのである。客も入っていないのに、彼女たちは大きな声で卑猥な歌をうたう。この暑いのおでんでもあるまいとは思ったが、その屈托くつたくのなさそうな三味線の音が帆村の心をうったらしく、彼はそこへ入って酒を所望した。

それから後のことは、帆村の名誉のために記したくない。とにかくその日の夜十時になつて彼は転げこむように大阪駅に入つていった。

「富山へ行くんだ。一つ切符をどうぞ」

彼はまだ呂律ろれつのまわらぬ舌で、切符売場の窓口にからみついた。ひどく飲みつづけていたらしい。飛行機なんか、もうとつくの昔に乗りおくれでしまっている。

「おい山下君。ど、どこかへ逃げちやつたよ」

彼は、自分にも記憶のない人の名をよんだりなどしている。

彼は午後十時十八分の列車に、ようやくのりこむことが出来た。そして寝台の中にもぐりこむが早いから、うわばみ 鱗のような寝息をたてた。よほど飲んだものらしい。

列車ボーイに起されて目がさめた。

まだ腰がふらふらと定まらない。洗面所へ行ってみると、満員だった。窓外は朝の山々や田畑がまぶしく光っていた。

車室へかえつてくると、もう寝台はきれいに片づいていた。食欲がない。どうも変だ。昨日はなぜあのように飲みすぎたのだろう。軍艦横丁のおでん屋に顔をつきこんでから、ひどく酔よのまわったことを覚えている。それから後は、連つれが出来たらしく、誰かと一緒に飲んでまた飲みつづけた。大事を前にして、どうも不思議な自分の行動だった。酔いではなく、ますい 麻酔のようにも思う——と帆村は悔かい恨こんの体ていである。

富山駅では大勢の人が下りた。

帆村もぐらぐらする腰をあげて下りた。外へ出たがどうも気分がよくない。

とうとう思いきって駅前の交番へとびこんだ。甚だ気がひけるがあまり頑張っていて更に大きな失態をしては、事件の依頼主に対し相済まぬと思っただからである。

身分証明を見せると、詰所の警官は本署に電話をかけてくれた。間もなく栗山という刑事と、ほかに医師が一人、帆村を迎えにきた。

「これは麻痺剤まひざいのせいですよ。誰かに一服盛られましたね。すぐ注射をうちましよう」

医師は心得顔に、注射の用意にかかった。

「やっぱりそうか。あの山下とかいった男が、喰わせ者だったんだ」

まぶた 瞼の間にのこるその山下とかいった酒の連こそ恐るべき人物だったのだ。生命に別条のなかつたのは何よりだった。帆村は交番の奥の間に寝かされた。

栗山刑事が、帆村にかわって公会堂へ行ってくれた。そして彼のため書きうつしてきてくれたのは、上のような割り算であった。

〔第八図〕

⑥

8 □ 3

7 4 □ () □ □ □ □ □ □ □ □

□
□
□
2

□
9
□
□

□
7
4
□

□
□
4
□

□
□
□
□

0

(終)

なお「終」という字が一字書きこんであるところを見ると割り算の宝さがしの旅は、この富山をもって終ったわけだった。

割り算を見ると、いよいよ答は最後の一桁まで出た。3という数字がたっている。そしてすっかり割り切れている。これでこの割り算は完結しているのだ。

帆村はうづく顛顛こめかみをおさえつつ、このノートに見入った。ここで急速に答を出さなければならぬ。六桁の被除数は、まだ第一数字しかわかっていないのだ。

「帆村さん。これをお飲みなさい」

医師はコップに熱い酒をついで帆村の枕もとへ持ってきてくれた。帆村が遠慮したいという、医師は笑って、

「いや、これは土地での一番いい酒です。これをぐつとやると、かえって早く元気づきますよ」

帆村は、その親切な心の籠こもったコップをとりあげながら、最後の解法にかかった。

〔第九図〕

⑥

ハ

←

8 X
3

リ↓0

まずこれを第九図のように整理した。すぐ目につくのは、答の一の桁に現われた3と、除数の749とをかけると2247となることだ。つまりTUVWは2247である。うまく割り切れているところを見ると、Vは4でなければならぬが、この点もちゃんと合う。

従ってQR4Sも同じく2247となる。

またG=S=7である。

さてその次はどれが決るか。

「これはおかしい」

帆村の顔が歪ゆがんだ。

〔第十図〕

8X3

749) 6CDEF7

5992

K 9 L M

N 7 4 P

2 2 4 7

2 2 4 7

0

ここまででは進んだが（第十回）——あとはどうもうまく決らない。帆村は苦しそうに呻うなりながら寝返りをうった。

「どうして解けないのだろうか。おれの頭はばかになったのか」

帆村は拳をかためると、自分の頭をガンとなくった。

「駄目だ。解けない」

帆村は算術地獄におちこんだと思つた。さもなければ、頭脳が麻痺まひしてしまつたのだ。ここまで解きながら、答が出ないとは何としたことであろう。はるばる富山まで来て、交番の奥の間に呻しんぎん吟ぎんしている自分が世界中で一番哀れなものに思われた。どうにでもなれ！

そのうちに酒が身体に廻つてきた。疲労の果はてか酒のせいか、彼はうとうとと睡りはじめた。

謎は解けた

ぱつと目がさめたとき、彼は急に気分の方がよくなっていることに気がついた。彼は再びノートをとりあげた。

暫くノートの表を凝視ぎようししていた彼は、思わず、

「うむ」

と、呻って目をみはった。

彼は畳の上をとんとんと激しく叩いた。^{たた}

隣室に待っていた栗山刑事が、とぶようにして入ってきた。

「帆村さん、どうしました」

「おお、栗山さん。今日東京へ飛ぶ旅客機に間にあいませんか」

「えっ、旅客機ですか、こうつと、あれは午後一時四十分ですから、あと四十分のちです。それをどうするんです」

「僕は大至急東京へ帰らねばなりません」

「そんな身体で、大丈夫ですか」

「いや、大丈夫。謎が解けそうです。すぐ帰らねばなりません。どうか飛行場へ連れて行って下さい」

親切な栗山刑事は、帆村の身体を抱えるようにして旅客機の中へおくりこんだ。

午後一時四十分、ユニバーサル機は東京へ向けて出発した。

帆村は青い顔を窓から出して、見送りの栗山刑事へ手をふった。そしてほっと溜息をついた。

とうとう四日間というものを欺だまされとおしてきたのだ。

帆村の心は穩おだやかでない。

割り算の鍵キーは一体どうなったのか。

鍵は解けないともいえるし、解けたともいえた。なぜなら予期した六桁の数は遂に分らないのだ。分らないように出来ているのだ。なぜなら答が二つも出るのである。

問題は答の二桁目のXだ。これは5か9かのどつちかというところまで進んでいたが、今となつては、5でもよければ9でも差さしつか支えないことが分つた。つまり答は二つだ。

Xが5であれば、求める六桁の被除数は638897となる。またXが9であれば、668857となる。暗号の鍵の数字に、二つの答があつてよいものか。ぜひとも一つでなければならぬ。そこにおいて帆村は万事を悟さとつたのだ。

「うぬ、一杯喰くわされた」

彼ははじめて夢から覚めたように思った。なぜ彼は欺だまされたのか。彼の敵は、帆村をどうしようと思つていたのか。すべては謎であつた。それを解くには、一刻も早く東京へかえるより外ないと気がついたのである。

どうやら東京には、彼の想像を超越した一大変事が待ちかまえているようである。一体

それは何であろうか。

帆村の羽田空港に下りたのは午後四時だった。彼は早速電話をもって、木村事務官を呼び出した。

ところが意外にも、内務省では、木村事務官などという者は居ないと答えた。いくど押し問答をしても、居ない者は居ないということであった。

^{さすが}追の帆村も顔色をかえた。今の今まで、内務省の情報部を預るお役人だと思っていた木村なる人物が夢のように消えてしまったのである。

さてはと思つて、こんどは自分の事務所を呼び出した。

すると、電話が一向に懸らないのであつた。留守番をしているはずの大辻は何をしているのであろうか。胸さわぎはますますはげしくなつていった。

もうこれまでと思つた帆村は、空港の外に出ると、円タクを呼んで一散に東京へ急がせた。

木村事務官は消えさり、事務所は留守で、大辻は不在だ。そして自分に変な謎の数字にひきずられて四日間というものを方々へ引張りまわされた。一体これはなんということだ。「ははあ、そうか。こいつはこつちに油断があつて、うまく欺されたんだ。うむ、すこし

ずつ見当がついてきたぞ。相手は例の秘密団体の奴ばらなんだ！」

帆村の顔は、次第に紅潮してきた。

自宅にかえった帆村は、早速各所に連絡をとって情報を集めた。そして遺憾いかんながら彼が欺されたことを認めないわけにゆかなくなつた。

すぐさま駈かけつけてくれた専門家の説明によつて、一切は明らかになつた。帆村を欺したのは、たしかに例の秘密団体の諜ちようじゃ者たちであつたのだ。木村といい山下といい、それは皆、その要員であることが分つた。

最後に残る謎は、なぜ帆村をこうして四日間も引張りまわしたかということだ。

「それは分つているじやないか。君の事務所に持つている短波通信機だよ」とその専門家は、ずばりと星を指した。

「えつ——」

「なあに、例の通信機の押収で、彼奴等は東京と上海との無電連絡が出来なくなつたというわけさ。そこで目をつけたのは、君のところの通信機だ。そこで君を四日間、事務所から追払つたというわけだ。その間彼奴らは、君の機械をつかつて、重大なる通信連絡をやつたのに間違いない。そういえば、僕等の方にも思いあたることがある」

さすがの帆村も、これを聞いて、呀あつと愕おどろいた。それではあの諜者連は彼の持っている短波通信機に用があったのか。

「すると留守番の大辻はどうしたんだろう」

大辻はそれから一週間目に、冷い死骸となって帆村のところへかえってきた。
なぜそんなことになったか。

その間の消息はのちに、帆村が帳簿の間から発見した大辻の手記によって明らかになった。それには鉛筆の走り書でこうかいてあった。

「先生が大怪我をされたからすぐ来てくれという知らせで、私は出かけます。八月二十六日、午後十一時三十七分」

これで一切は明白となった。諜者連の方では、大辻が事務所に残っているのは短波通信機がつかえないから、帆村が大怪我をしたなどといって、大辻を誘いだし、片づけられてしまったに相違ない。大辻と来たら、おとなしく監禁されているような男ではないから、このような最期を招いたのであろう。

「こんなわけで、僕はすっかりふりまわされて、恥をかくやら、大失態を演ずるやら、今思い出しても腋わきの下から冷汗が出てくるよ」

前代未聞の暗号数字事件を述べ終えて、帆村は大きな吐息を一つついた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第5巻 浮かぶ飛行島」三一書房

1989（平成元）年4月15日第1版第1刷発行

底本の親本：「俘囚 其他く推理小説叢書」雄鶏社

1947（昭和22）年6月5日発行

初出：「現代」大日本雄辯會講談社

1938（昭和13）年3月号

※底本の本文で、全角文字による横組みとなつてゐる数字と数式は、ラテン文字の処理ルールに準じて半角で入力しました。ただし記号は全角を使用し、記号と和文の接するところは、半角開けませんでした。

※図中の計算式は、底本では横組みです。計算式の「□」付きの文字は、「□」なしで入力しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5:86）を、大振りにつくつています。

※初出では「彼奴等」に「彼奴等《あいつら》」、「彼奴ら」に「彼奴《きやつら》とルビがふられています。

入力：田中哲郎

校正：土屋隆

2005年11月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

暗号数字

海野十三

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>